

隔たり、意味あるいは有用さを失い、自分の不毛さに当惑している。“solid”は肉体の氷結あるいは石化を暗示するが、これは「ニオベのように泣き濡れた」(1.2.149)母の再婚を非難する王子の神話的感受性の欠陥を示している。誇りにした子供達を殺されて石になったニオベは、母に耐え得べくもない悲しみの像である。この含意は、一人息子ハムレットの呪いの論理が、嫉妬深いヘラの子のアポロンの弓のように、母にニオベの運命を強いていることを暗示する。同時に、自ら母へのおもいやりを断ったハムレット自身もまた、例えどのように自分の論理を信じていようと、身が石と化したように感じることによって、人は「石」ではなくむしろ「露」であること、石になるのを強いる論理は人間性に反していることを、実証しているのである。

- 5 亡霊の出現を知らないガートルードは、「寝室の場」で、ハムレットに現れた亡霊の作用を全て自分の責任として引き受ける。その母親らしい反応が、女の肉体の罪深さの教説と一致する経緯については、拙稿“*When Honour's as the Stake*—「ハムレット」覚え書き—”福岡女子大学文学部紀要「文芸と思想」48号(1984年1月)で多少触れた。

オセロは妻の遺体の上に倒れ伏している。妻を失ったマクベスに王冠も命も意味を持たず、オフィーリアの埋葬に出会ったハムレットは生きようと企むのをやめる。彼女達は幻滅の象徴的主題をなす「失われた者」であって、失われた相で存在を主張しており、失われた者と失った者との間に本来あるべきであった関係に対する私達の哀惜による他には、彼岸で償うことはできないのである。

死んだ娘にすぎないリアは、王の権威を脱ぎ捨てて、娘の死に狂おしく抗議する一介の老人となっている。女のために自殺するオセロは、恋などに惑わないと公言した將軍ではなくて、一人の女に世界の意味を託すことを知った男である。最後の決闘をするマクベスは、名誉に守られて名誉を守る王者ではなくて、愛した者を失い血に飽くに至っても、それゆえに彼の血を求めてやまない世界に一人で逆らう生身の人間である。彼等は最後に、愛すべき者を愛するのだから不毛と不幸に陥るほかない「人間」を露出している。娘の息を探して絶息するリヤの、死に至る模策の姿が物語るのは、その娘を放逐した時にも彼は同じ模策の旅の途中にあったということである。

第一独白のハムレットは、愛すべきものを喪った嘆きを隠すよう強いられた被害者であるが、同時に、それを強いられた通り行く順法者であり、その意味で彼自身の加害者である。愛すべき者に歪んだ行動を強いる世界に属しているのである。彼等は、名誉にかけて、挫折に至る道を進んで行く。これら不幸な人物達は頑な理想主義者だと言ってもよいし、公式論者でも、権威主義者でもある。その理想、公式、権威は超自然的な威力を備えているのであるが、その威力は、人物達自身も気付かない程の〈触れ合い〉の欲求の激しさの比喩、「言葉、言葉、言葉」の試練の比喩であると理解されなければ、挫折を挫折と感じる自然な人間能力を圧倒する〈倒錯〉の比喩でしかありえない。

(October 1987. 未完)

注

- 1 S. T Coleridge: *Shakespearean Criticism*, ed. by T. M. Raysor (Everyman's Library, 1967), Vol. 1, p. 34.
- 2 T. S. Eliot, "Hamlet", *Selected Essays* (F.& F., 1958).
- 3 G. Wilson Knight, "The Embassy of Death", *The Wheel of Fire* (Meridian Books, N. Y.: 1957).
- 4 Riverside 版は"sallied (=sullied)"を採っている。しかし、この時点のハムレットは父の栄光を体して他者を呪うだけである。彼が自分の汚れを言うのは、心底好きで求愛した「美しいオフィーリア」が中身は醜いのだと信じる「尼寺の場」においてであり、その時には最初太陽であった父も「罪が重いに違いない」亡霊になっている。第一独白のハムレットは、今まで彼を包んでいた世界から一挙に

分を叱り鞭打たなければならないハムレットの場合と酷似している。

Prompted to my revenge by heaven and hell

(*Hamlet*, 2. 2. 621)

now could I drink hot blood,
And do such bitter business as the day
Would guake to look on.

(3. 2. 415—417)

O! from this time forth,
My thoughts be bloody, or be nothing worth.

(4. 4. 65—66)

この相似を相似として認めるのが困難であるとするれば、私達はハムレットの復讐義務を超越的に正当であると信じたいのであり、マクベスに突きつけられた野心の義務の超越性を信じたくないのである。多分、私達は、家庭の妻への忠誠を、父であり王である者への忠誠と同じように眺めることができないのである。しかし、自らの信念に沿って、自分の眼で確かめながら、内的必然性に従った結果、不幸な状況にはまりこみ、自分を含めた世界のために希望を育てる術を失い、生き残る人々に失意の世界を任せて、自らは「死」に「幸福」(5. 2. 361)を託す点に注目しよう。ハムレットもまた、行動の因果律によって死を宣告され、喪失の悲痛を前にして、ただ死に瀕した自分の命を自分の証しとする他はないという共通の条件に従っている。

超越的な秩序の導きに従う努力に対して、希望が約束されていたのではなかったか？「約束された終り」(*King Lear*, 5. 2. 264)に裏切られた幻滅が、これらの人物達を悲劇的英雄の楽園から隔てている。彼等の幻滅は、魂を災いから夢幻に誘う「忘れの川」のように優しく介入するのではない。苛酷に襲って来るのは、優しかった一人の愛娘、一人の母、一人の妻、一人の恋人の具体的な働き掛けが現にあり得た世界を喪失したという〈墮落〉または〈墜落〉の実感なのである。

もし一般に言う〈悲劇〉が、交錯する愛憎の人間模様から、運命の形而上学へと昇華すると言えらるれば、シェイクスピアにあっては当初から運命的超越的形而上的な言説に導かれて争乱状況が現れ、予想もしなかった人間関係のきしみの中に投げ込まれた人物が、形而上学の約束の不可能を経験する。消滅したものを求める憤怒と絶望の旅の果てで、リアは末娘の遺体を抱いて絶息し、

Methinks it should be now a huge eclipse
Of sun and moon, and that th' affricted globe
Did yawn at alteration.

(*Othello*, 5. 2. 98—101)

My thought, whose murder yet is but fantastical,
Shakes so my single state of man that function
Is smother'd in surmise, and nothing is
But what is not.

(*Macbeth*, 1, 3, 139—141)

そのような苦しさにもかかわらず、それぞれが強いられる行動には有無を言わせない超越的な根拠がある。彼等にとって、内心の苦しさは、錯誤の印であるどころか、疑い得ない秩序に忠誠を尽くすことができない心の弱さの印なのである。自分を虚しくしてでも秩序と同化して、これまで守って来たきっぱりとした名誉ある行動様式によってけりをつけなければならない。心に血を流しながら、リアは天地の理法を守らなくてはならない。「正義」は妻を恋うオセロに容赦なく妻を殺せと命じる。「男らしさ」の要請が夫婦関係の大切な要素を拒否するのを感じながら、マクベスはそれによって混乱を乗り越える他は無い。

So be my grave my peace, as here I give
Her father's heart from her.

(*King Lear*, 1. 1. 125—126)

O balmy breath, that dost almost persuade
Justice to break her sword! One more, one more.
Be thus when thou art dead, and I will kill thee,
And love thee after.

(*Othello*, 5. 2. 16—19)

Bring forth men-children only!
For thy undaunted mettle should compose
Nothing but males.

(*Macbeth*, 1. 7. 72—74)

これは、復讐義務を終始信じ続けながら、それに心からのめり込めないで自

この人物達が過つのは、何かの新たな快樂の方に欲望のままに引き摺られるからではない。彼等は、これまで自分がその一角を受け持って来た世界が思い掛けない様相を呈するのを見る。予想もしなかった人間解釈、すくなくとも自分とは無縁の筈だった人間解釈の前に立たされる。その時、世界解釈というものがそれを受け入れる者の生存の欲求と何等かの価値の信仰の形で直結していることが自ら明らかになっているのだ。

The barbarous Scythian,
Or he that makes his generations messes
To gorge his appetite, shall to my bosom
Be as well neighbor'd, pitied, and reliev'd,
As thou my sometime daughter.

(*King Lear*, 1. 1. 116—120)

But there, where I have garner'd up my heart,
Where either I must live or bear no life;
The fountain from the which my current runs
Or else dries up: to be discarded thence!

(*Othello*, 4. 2. 57—60)

I have no spur
To prick the sides of my intent, but only
Vaulting ambition, which o'erleaps itself,
And falls on th'other.

(*Macbeth*, 1. 7. 25—28)

彼等は来たるべき快樂の希望に酔ってなどないのである。末娘を放逐するリアは親の心を捨てなくてはならない程に悲しく、デスデモーナの不貞を信じるオセロは貞節な彼女の記憶を奪われる苦痛に悶え、王権を予言する超自然の支配に逆らえないマクベスは人格の纏まりを失うまでの恐怖に震えている。

I lov'd her most, and thought to set my rest
On her kind nursery.

(*King Lear*, 1. 1. 125—126)

O insupportable! O heavy hour!

As full of grief as age, wretched in both.

(*King Lear*, 2. 4. 271—273)

I have done the state some service, and they know't—
No more of that. I pray you, in your letters,
When you ahall these unlucky deeds relate,
Speak of me as I am; nothing extenuate,
Nor set down aught in malice. Then must you speak
Of one that lov'd not wisely but too well.

(*Othello*, 5, 2, 339—344)

And be these juggling fiends no more believ'd,
That palter with us in a double sense,
That keep the word of promise to our ear,
And break it to our hope.

(*Macbeth*, 5. 8. 19—22)

また、いずれの場合にも、致命的失策と呼び得るものには至高の秩序の感覚がかかわっている。リアがコーデリアの返事に憤激するのも、オセロがイアゴの知恵を信じるのも、マクベスが超自然の誘いに引かれるのも、そうせざるを得ないからである。

For by the sacred radiance of the sun,
The mysteries of Hecat and the night;
By all the operation of the orbs,
From whom we do exist and cease to be;
Here I disclaim all my paternal care....

(*King Lear*, 1. 1. 109—113)

It is the cause, it is the cause, my soul;
Let me not name it to you, you chaste stars,
It is the cause.

(*Othello*, 5. 2. 1—3)

Two truths are told.

(*Macbeth*, 1. 3. 127)

妬の言葉に隠れる他はないのである。

ハムレットとハムレット王との悲痛な疎外感から、他の人々の心を察することができる。彼等親子が奪われた権利を掲げて不毛な活動に専念する時、他の人々も口に出せない苦痛を逃れようともがいている。彼等が怒りより悲しみに満ちている時、他の人々も聞き届けられない祈りをつぶやいている。これが「弱い者」の認識の実態である。それを正面から見なければ救いは来ない。救いは「呪われた運命」に満足しない「人間」にある。

権利を主張した拳げ句に共倒れに終わる世界は、同時に、共通の敵を確認できれば殺し合った同士でさえ赦し合うことができる世界である。それなら真の共同の敵は、敵味方の区別という幻想である。呪われた幻像世界を吹き消すただ一つの方法は疑う前に心を開くことなのだ。

とは言っても、＜他者を殺したり呪ったりする十分な理由があると信じた時に、人は彼の内に用意された救いを無にする＞と説くことは誘惑的に易しい。実践するには、攻撃に反撃を強いられるよりも、「前を見、後ろを見る」英知と勇気が要る。何故なら—ここからは「言葉、言葉、言葉」の領域に入りそうで踏まれるが—何故なら、人は死が敵であるかのように生きる習いだからであり、その結果不安に閉ざされた世界で死は脅迫の道具となり、個の尊厳を賭けて入念に演じられる生涯の舞台は死との接触に生の意味を帰しさえするからである。この「悪夢」の真実と倒錯を身につつまされるように描き出して、救いと安息の可能性を示唆できるのは、「そうだ、芝居だ」(2.2.604) ったのではないであろうか？

8

以上述べて来たような観点から「ハムレット」と並べて「リア王」、「オセロ」、「マクベス」などを眺めると、著しい共通の特徴に気付く。すなわち、主人公達が悲劇的挫折に至る道程は、他の人物達との関係の客観的な進行に照らせば、明かに思考と行動の歪みを見せているけれども、彼等の行動を導く価値の選択と信仰の論理から見る限り、悪徳のために選択を誤ったものと解釈することはできないのだ。彼等是对立する二つの要請の間に挟まれ、支配的原則に従うために苦痛を押しつけて局所的感覚を振り切る。しかしその結果、願い通り秩序立った関係に至るどころか、孤独の中で自己喪失の極みに至るのである。

You heavens, give that patience I need!

You see me here, you gods, a poor old man,

この側面は、独白的情緒に染め上げられた〈観客〉意識からは見えにくい。だから私は、登場人物達の自意識を越えた時間空間の構図がこの作品にあると想像する。現実生活の無数の煩いから束の間逃れた観客席で、観客の心は、独白するハムレットのように、最も不用意に正直に自己満足と憂悶とをさらけ出す。そこに「芝居」が黙って、ハムレットの言う「空鉄砲」(3. 2. 266)を打ち込んでいる。苛立つハムレット王子を介して独白席の平穩の根拠が問われ、ハムレットを含めた〈観客〉の「急所」の所在が問われていると想像するのである。

ハムレットの「言葉、言葉、言葉」の知的な誇り高い努力と、その絶望的な無効さとの間の、呆れるような距離によって批評されているのは、黙約によってハムレットと観客との間に成立している冷たい〈言葉〉の制度であり、批評の土台となるのは分裂を容認しない熱い〈情念〉の表現欲である。

第一独白における価値観と生活術の相剋は、特異な個人の適応不全状態ではなく、特異な人間関係の倒錯の反映でもないと思われる。それは、信奉する自己表現様式によって欲求を抑圧される人間の姿であり、それが生命の流転と継承の節目に露呈したものであり、この様式が流転と継承にどのように対処して来たかを示すものである。人は、思い掛けない状況に会して、植え付けられた適応の機制に従って判断し反応する。しかし、思い掛けない状況とは、同じ状況を切り抜けようとする大勢の人々が、同じく精神の秩序に組み込まれた相似の機制を別の立場から発揮するために相互に見込み違いが生じる状況なのである。協力の仕組みの中に未解決に残っている利害の衝突を「名誉」の支配力が覆い隠して来ている。だから、共通の理想に導かれる者達が殺し合い、惨劇を生き延びる人々が生き延びている間は「名誉」の秩序が維持されるだろう。ハムレット王兄弟にも、デンマーク王とノルウェイ王との間にも、ノルウェイ王子とデンマーク王子との間にもそれはあてはまる。

皆、互いに鏡のように似ている。そして、鏡のように反応し合う。これは必然の符合である。他者に苛立つ者が私的な苛立ちの後ろめたさを独白に隠しても、苛立ちの動機を隠してルール通りに行われる正義の行動は、相手の苛立つ心の中で独白のルール通りに歪むのだ。それぞれ別個の人間の心の中で、想像力と光景が干渉し合っているだけであり、影の戯れであるけれども、同じ解釈術がどちらにも使われているために、偶然の符合が必然に起こり続ける。隠した筈のものが、実際には確実に隠されていながら、隠そうとする心の苦しみは消失して、悪意の幻覚だけが向き合ってしまう。同じ幻想を互いに相手だと恐れているのだ。心は不安に閉ざされ、自分の弱さを表すのを恐れて、自尊と嫉

ハムレットは、復讐に欠けた欲求を補うために「名誉」の名による「聖なる野心」(4. 4. 49)の要請に従う。「なんと全てのことが僕を告発することか！」で始まる独白(4. 4. 32-66)は、裏切りを禁じる体制秩序の権威が個人の内奥の道徳的選択として殺意を選び取らせる様子を見せる。だから、「目に見えない出来事」(50)を創り出すこの「目に見えない出来事」を悪い選択と呼ぶだけでは、聖なる理想を目指す個々の人間の営みを中傷することになる。

ハムレットは死に安息を求めるほかない仕儀に立ち至っても、「私の物語」(5. 2. 349)が「特別な摂理」(22)の下にあると信じて死ぬことができる。父を偲ぶハムレットにとって「日の神」にも似た「卓越した王」がどこまでも父の原型であり、復讐を頼む亡霊はどこまでも違和感のある行動形式と結びついた違和感のある存在である。また、亡霊の権利意識は、圧倒的な悲痛にもかかわらず、自分を天使に近い者と信じることができた誇り高い王者の自意識に基づいており、批評の基点となるのは充満した生命感である。兄殺しの罪に苦しむクロウディアスでも、秘密の罪によって成就した王権の舞台においては、狼藉者の甥に脅迫され、謀略に訴えるのを余儀無くされ、非業に殺される自分、「友」(5. 2. 324)の助けに価する善良な王である自分を疑わない。「毒を盛られた」(310)と息子に伝えて死ぬガードルードは、ハムレット王と同じように、死の突然の襲来に驚く。どの人物も自分の善良さを信じており、自分の行動を善良さで説明することができ、信じていた約束から裏切られる状況を苛酷と感ずることができる。彼等が洗練を信じる者であり、洗練された者の道徳的美的志向に基づいて行動していることだけは疑えない。どんな錯覚をしていても、彼等が等しく<人間>であるという事実だけは疑えない。

文化的洗練の理想が各人の動機に共通の形を与え、その形から苦痛が生じ、約束を裏切られた当惑が裏切りへの密かな怒りを産み、衝突が起こり、裏切られた者の怒りが産み出され、それがまた…。

苦痛が苦痛を生み続ける。誰にもこの裏切られた状況を楽しむことはできない。苦痛をもくろむ悪を抹殺する欲求を感じないでいることは不可能である。しかし、上の無限循環に捕らえられた存在は、苦痛に基づいてその場その場に反応し、苦痛の終わりの無さに基づいて世界を定義するだろう。つまり、近距離では狂気説、地平では運命論に傾くだろう。<運命>が人物達に逃れられない物語を演じさせ、それに合わせて手に負えない<性格>が配置される。ポロニアスを殺したハムレットが自分を「神のしもとでありしもべである」(3. 4. 175)と言う時、人間の手を離れた狂気論と運命論は、まるで透明な目であるかのように論証不用である。目の位置だけについて言えば、ハムレット王子は、天の一角から苛立たしい人間関係を眺めた天使のようだ。

の錯誤は一目瞭然であるが、「悪魔」という言葉の詭弁的な誘惑を実証する。すなわちハムレットは、亡霊の命令に〈悪魔の誘い〉という性質を直感しているのであるが、比喩である悪魔を動作主体のように扱って、父への信頼を温存している。このすりかえは最初からの手順の倒錯の性質を暴露するものであって、もともと〈悪魔〉の比喩が自己省察であるよりは敵意の表現なのだ。王子が命令を疑うのは彼自身の正直さによるものであり、悪魔の出現を疑うのは教育に形而上学的歪曲があるからであり、その比喩を父に適用しないのは、それが人間に本来適用不能な歪曲だからである。

道徳命令の倒錯と呼んだものは、規範の命令性と説得性の分離である。すなわち、父子関係という命令の場の拡がりとは、復讐すべき相手との関係という認識と働き掛けの場の拡がりとの食い違いが、ハムレットを苦しめる。これが「ハムレット」を所謂〈復讐劇〉から区別する核心の問題であるだろう。無条件の掟が含む倒錯は、忠実であろうとする主人公の内心の困惑に表現される。ハムレットの特異な心理が問題なのではなく、弟による兄王殺しが特別に異常なのでさえなく、そのような異常を秘密のうちに隠して成り立つデンマーク社会の正常さが問題なのである。

亡霊の命令が王子の内部に惹き起こす激しい葛藤は、叔父王の人格を軽蔑し母の再婚を呪う感情と混じり合って、この芝居の特徴ある雰囲気を作り出す。復讐を躊躇する心は母の不倫を許容する世界を嫌悪する心と不可分であるが、それが等しい意味を持つことに本人は気が付かない。しかし、叔父の犯罪を確認した後の独白は、遷延の意味を明かにしている。

'Tis now the very witching time of night,
When churchyards yawn and hell itself breathes out
Contagion to this world: now could I drink hot blood,
And do such bitter business as the day
Would quake to look on. (3. 2. 413-417)

ハムレットは、彼自身の批評力を含めて批判を受け付けられないような取り憑かれた状態、エクスタシー状態にならなければ行動不能である。しかし、それをこのように相対化する精神は、その状態になれない。彼は「良心に欠け、人を欺し、好色で、人の心を持たない悪人」(2. 2. 581) という人間像を激情的に受け入れなくては復讐できないが、復讐のためにその悪人の「良心を捕らえる」(605) という倒錯に追い込まれる。事実認識よりも命令が先行するという手順の間違いが重大問題であるのは、それが混乱を引き起こしても、思考の手続きの間違いが原因であると悟るのが不可能だからである。

拒絶する状態という無慚な想像力の地獄から出現するのである。

王子に〈母に手を触れるな〉と言いながら、〈心の針に突き刺されるに任せよ〉と言う亡霊は、妻が悪いから自分が苦しんでいると信じ込んでいるが、妻が悪いと信じるから苦しんでいるのであって、自分が正しいという信念が彼の〈心の針〉なのだ。結局彼は妻を自分を慰める道具として所有する精神であり、死んだ夫への愛と彼が残した世界への愛を調和させて生きる妻の健気さを愛することを知らない。その結果、妻の胸で「永遠」(1. 2. 73) に託されて大事にされている彼自身の愛の記憶からも切り離されて無用に悶える。それは、人は愛さなくては孤独であると証言している。

独白するハムレットが独白的父子関係を介して登場する秘密の行動世界は、もし父が死なず王座の中心が動かなかつたならば、裏側から主張する必要が無かつた世界、栄光の優越感が欠失感の表現であることを知る必要が無かつた世界そのものである。亡霊と王子が躍起になってこの裏側での彼等の出現の記憶を世界の表側から消し去ろうとするのは、威光の神聖さが暗闘を代行する以上のものであつたからであり、暗闘が退行だからである。

ハムレットの「義務」が命令と化した私闘に還元される時、彼の「人間」は「遷延」という彼の教養と論理では理解し難い抵抗を示す。このように錯覚を演じていてさえも、人は喜びと悲しみを正しく感じ続けて誤ることがない。人は善と悪の二重構造を持っているのではなく、調和と流血の区別の感覚すなわち進化と退化の方向感覚を手掛かりに、模策の途上にあるのである。

7

主体的な行動には欠かせない手順がある。復讐命令は先ず「この命令を正当であると思うか？」という問いをなすものである。受諾するなら、王子は「かくかくの目的を遂げるのに最も正当で有効な方法であると判断するから、命令を受諾する」と答えなくてはならない。この応答の中で、命令された仕事は実行する者の欲求と結びついて、実行者が自分に命じる義務になる。ところが、ハムレットにとって行動は「呪われた悪意」(1. 5. 188) の過去に固着して、もたらすべき世界像を欠いている。欲求が不足しているから、動き出そうとして疑いにぶつかる。欲求の不足は義務の側から見れば熱意の不足であるが、義務命令の説得性の弱さであるのも間違いない。

証拠が無い、悪魔かもしれないというのは、詭弁である。証拠の欠如は父が事実を誤認している可能性を意味するのであり、「悪魔」は殺人命令の破壊的な性質の比喩なのである。正直な亡霊か、だます悪魔か、という問いの立て方

の仕事、その対象である世界、それを引き継ぐ責任、の意識が無い。亡霊も、突然に命の快樂を奪われた驚きの余り、自分の身体の死を「命と、王冠と、王妃」(75)を享樂して来た者の目で見ただけで、取り返し難く彼を失った者達の心を察することも、父に代って世界を愛する仕事を息子に託すこともできない。

亡霊と王妃との疎隔は、冒頭の場面での亡霊と兵士との疎隔と相似である。前王の忠誠な部下であった兵士は、今もデンマーク王の忠誠な部下としての行動様式を守っている。王の亡霊が彼等の共同の行動様式の致命的な盲点を象徴することを彼等が悟る筈もない。彼等が鉾を振るうのは、ハムレット王が今でも誇りにしているものに対して彼等が不誠実だからではなく、〈忠誠〉だからである。同一の王を戴く味方であると識別されない存在、すなわち敵味方の名札の背後にある〈人間〉に対する、〈忠誠〉の行動様式の不毛さを忠実に明かにするのである。

忠誠の義務は個人的関係に優先する。個人的共感を見無視する性質が、個人的な愛情の目で見ると特別に意識される。ガードルードの再婚は、死んだ夫に対する妻の個人的愛情とは無関係であって、皮肉にもハムレットの主張通り、彼女は夫の生前も死後も同じく彼の家と彼の「威光」に帰属している。固有の相続制度を持つ王冠の所有権に帰属する寡婦として働くことを要求されている。ハムレットの想起する王家の三位一体構造への忠誠こそ、死者の席にその弟が納まる形での解決の底にある大原則なのだ。

ガードルードが義理の弟の体を選んだのではない。死んだ夫の寡婦という名に支配されるのである。前夫の妻として選ばれた時に王権相続の付属物となっていたのである。「近親相姦」があるとすれば、兄と弟の違いを抹消し、女の心を見無視する王権の中にある。王子の継承権がかかわる意味では、「近親相姦」はこの母と子の間に成り立っている。

亡霊が妻の行動に感じる非情さは、妻の行動を「墮落」と解釈する彼の視覚の非情さに対応している。実際には、誰も非情ではない。もし亡霊に、妻が彼の妻であったばかりに何に奉仕し続けているか洞察できたら、愛されないことを恨む代わりに、愛することの悲しみを感じたであろう。妻のただ一つの希望である王子を彼女の知らぬ間に彼女から引き離しはしなかつたら。自分がどのような錯覚に基づいて何を犠牲にして私的な恨みを晴らそうとしているかを洞察できたら、自分の特権意識が生む恨みを鏡にして、罪を犯した継承者である弟の苦しみを憐れむことができたであろう。

こうしてみると、亡霊をめぐる苛責の「牢獄」の描写は、幻想の恐怖と幻想の悪の寓意であって、亡霊は、自分に囚われた精神が自分の救いである他者を

宗教的救済を受けない単純な死が人の知識を絶した「恐ろしさ」に満ちているのを見出す。肉体は死後の呪いに運命付けられたものと定義される。殺害者と忘却者への怒りには、生きる楽しみを奪われた生者としての苦痛と、死者にとっての死の恐怖の苦痛とが重なっている。

毒蛇の毒でも同じ結果になるのであるから、死後の恐怖は殺害者の責任ではなくて、死の「牢獄」に含まれる〈裁き〉の性質である。塗油に間に合わなかっただけで、毒が強かっただけで、つまり簡単に死んだだけで、定め業罰に付される。殺された事情も、「輝く天使」(1.5.55)にも似た美德も考慮されない。美德より塗油が大事、死ぬのは罪人の落ち度、という途方もなく非情な裁きなのだ。死の恐怖の脅迫的な形式主義が、塗油の儀式の救済力の形式主義を裏打ちしている。

ところが、恐ろしさの具体的な内容を探しても、健全な身体が腐って行く生理的な描写のほかは、「牢獄の秘密を漏らすのは禁じられている」(1.5.14-15)のであって、「一言聞くだけでお前の魂をすくみ上がらせる」(15-16)といった脅迫が煽情的に並ぶだけである。すなわち、死者が語る彼岸の様子は地上で人が説き聞かされていることを越えない。「それを言いに墓から亡霊が出て来るには及ばない」(125-126)のだ。

それこそ「牢獄の秘密」である。死後の死者にとっての死の恐怖の物語は想像の劇場の産物であり、亡霊という登場人物に実体化した「言葉」であるというのが「禁じられた秘密」なのである。死の幻想的な脅迫力は、命の喪失の不安の過剰な表現に過ぎない。この架空の脅迫力の受益者は、臨終の儀式に超越的形式的な権威を与えた者であるが、この儀式の架空の安心の受益者は、命の喪失の不安に晒された者である。つまり両者は矛盾し合いながら一つの肉体に重なる。彼岸の幸福の虚構が約束された結果、ハムレットにとって、社会行動としての殺人と復讐の善悪を論じるよりも、虚構の幸福から虚構の恐怖への転落に対して虚構による復讐を企らむことが必要になる。

妻の裏切りを嘆き息子の忘却を不安がる亡霊は、人々との信頼関係の中でのみ死者が安息できるのを暗示するが、父王の記憶に固執する息子の心が読めていないのは明かである。そもそも死者と生者との関係の困難は第一独白から一貫している。父を別格のものと記憶しているばかりに、ハムレットは他者による父の記憶を信じることができない。その結果、彼の記憶する死者と、死者の穴を埋めて営まれる生活とが、心と身体に分裂して衝突する。

人の死に会うとは、その人の存在と仕事をあらためて認知して、引き継ぐことである。寓意的に言えば、「救い主」を亡くした世界は救済の仕事を引き継ぐのである。ハムレットは、父の支配下の陽光の記憶の中に止まっていて、父

そうはならなかった。「肉体」を厭いながら宮廷のルール通りに生きていなくてはならない状況から、「呪われた運命」(1.5.188)を嘆きなが父の命令のルール通りに行動しなくてはならない状況に移ったに過ぎなかった。しかし、「呪われた運命」の下のいたましい「私の物語」(5.2.349)を「摂理」(220)に預ける前に見ておくべきことがある。

危険だから行くなと抑える友人に〈死んでもいい、魂に障りはあるまい〉とハムレットが言う時、ホレイシオの悪魔説の恐怖に打ち勝つのは、父を捨てられない子の情である。結局、地獄の「風」は吹かないし、亡霊は人間の言葉以外の道具を持たない。「悪魔」は幻想なのだ。むしろ、人を「亡霊」にする風は、抑えられて苛立つ王子から彼の身を案じる人々に向かって吹く。

王子の友人達は王子への好意を、他界からの訪れを恐れ避けることで示す。この態度が、父の子を苛立たせる。彼の苛立ちは、身近な仲間と区別して他者を敵視する態度の本質的な手落ちを指摘するものなのである。しかし、苛立つハムレットもまた「妨げる者を亡霊にする」(1.4.85)行動のなかに、狭い連帯を守るために他者の干渉を敵視する習性を見せる。ホレイシオの心配をはねつけて亡霊に走り寄る時、ハムレットは悪魔説で表現された愛情を剣で表現された愛情によって拒否している。

愛情が愛情に対立しているのではない。悪魔の脅迫力に剣の脅迫力が対抗しているのだ。王子とその友人の間にも、ホレイシオと前王との間にも、父と子の間にも、悪意も敵意も無い。ただ、死を恐れる「想像力」(87)が、「恐ろしい姿」(72)の幻想を生み出しているだけである。しかしその結果、ホレイシオの抑止の力に対してハムレットが腰に用意した剣を抜けば、「恐ろしい姿」の幻想はあわや流血の状況を生んでいる。愛情から死が生まれ、その現実が禍々しい憶測の証拠になる。それでも、味方の兵士達は王子が「想像で取り乱した」(1.4.87)と言う。敵ならこの狂気を許さないだろう。

誰も自分自身の想像力が取り乱したまま固定しているとは思えない。だが、彼等が現に演じているのは、死の「風」の幻想、「悪魔」の幻想が、恐れた通りの結果をもたらすオカルト物語だ。そして彼等の誰も全貌を眺める視点を持たないその舞台上で彼等一人々々は、悪魔と争う人間の物語、愛情のための殉教の物語、黙し得ない恨みの物語を独白として演じる他はないだろう。死の恐怖を創り出すのは、人間の弱さへの気遣いなのだから。

亡霊は死の衝撃を、肉体の腐敗、生きて人々からの疎隔、死の「牢獄」の恐怖、の三つの相で語るが、死者にとっての死の衝撃は二つの矛盾する解釈を受けている。一方で死は「健全な」(70)肉体を持つことの楽しさ、有り難さ、忘れ難さを照らし出す。他方で、強い毒のために塗油の機会を失った亡霊は、

弟」が、愛すべき国土を守る仕事につながる同胞となっていて、息子もまた、彼等をつなぐ役を果たしている母に協力するよう要請されている。

父と叔父を「神」と「獣」のように差別する動機はガードルードに無縁であるのに、そのような差別を前提にして彼女の行動を解釈すれば、彼女が「獣」であるという幻想が現れて、ハムレットはせめて呪いによって「神」なき「庭」の番人を演じざるを得ない。しかし、ハムレットは「獣」を下界に見捨てて学者の天国に住まう「神」にはなれない。記憶された情愛深い母を呼び求めずにはいられない彼の心は、彼がまさしく母の子であることを証明している。しかし、既に与えられた感受性と亡霊からの新たな要請によって、母の子は母から引き裂かれる。問題は単純で原則にかかわっている。家は戦いのためにあるのか、戦いは家のためにあるのか？亡霊は復讐に満足できるのか、人の暖かさを恋うのか？

「美しい国の希望のバラ」(3. 1. 152)を演じて来たハムレットが自分を支えている世界の歪みに気が付くのは、その圧力を今まで免れていたからである。体制の要求を受け入れながらその要求を不当な裏切りと感じたところに、天上で育てられた王子ハムレットの自由さの意味がある。家が楽園という比喩に相応しいのは、親の仕事が親の処世術の制約を越えて人間の真実を育てるからである。ここで「家」は「世界」に通じ、「親子」は一つの世界を相続する「同胞関係」に通じるのは言うまでもない。ハムレットは、彼を育てた楽園が、取り巻く荒れ地から「希望のバラ」に注がれる眼差しによって成り立つことに気が付くに至らないけれども、彼の批評精神が父母の愛を核にして父母の家の崩壊を生き延びるといふ生命相続の事実が、死を自ずから否定し、〈復讐物語〉の因果形式を破る。

6

この章は「ハムレット」の人間関係の全体的な意味と構造が一人の人物の言葉の構造に集約して現れるのを示唆するのが主な目的であるので、一篇全体に互って分析しないが、最後に復讐命令の意味に触れる形で全体を概観してみよう。

以上見て来たように、第一独白のハムレットにおいて価値観と生活術の葛藤と見えるものを分析すると、秩序の図式の権威に忠実に従う精神が、抑圧され分裂し、当惑と怒りと絶望に閉ざされている。この状況から脱出するには、正直な批評の自由と勇気が必要である。「冥想か愛の思いのような速い翼で」(1. 5. 29-30)と叫んだ時、復讐命令は閉塞状況に風穴を開ける筈だった。だが、

アスが密かに叛逆して兄に代わる時、ハムレットは密かに叔父の即位に叛逆と不倫を感じる。しかし、甥の良き父を演じようとする叔父も、母がその男を選んだことを呪う甥も、互いに相手の内実を直接知ってはいないが、互いに相手の密かな猜疑心に対応する姿を示す。これがハムレットの「予言能力」の仕掛けである。

この仕掛けは全ての当事者に、他者の悪と争う必要を押し付ける。全ての当事者が流血の正義感と罪悪感に引き裂かれる。殺人が忠誠と名誉の名によって神聖化されると同時に、個人を救う臨終の塗油の権威も絶対化する。反対に、名誉心が狭小になって社会の連帯性に衝突すると、殺人者は殺しを嫌悪する自分の心に出会う。私的家族的権利意識は、殺人を美化できない。私的殺人者は、私的名誉への忠誠ゆえに、忠誠の名で隠されて来た殺人の本質に出会う。クロウディアスも、ハムレットも苦しむ。

復讐者は殺人の厭わしさを一番良く知っているので、世界から嚴重に隠す。だから、「大地が懸命に覆い隠そうとも」(1. 2. 257) 殺人を自動的に暴き出す感受性は、殺人者が隠そうとする厭わしい動機の世界に属している。殺人を告発するハムレットの「予言」は、殺人と復讐の伝統的な物語に即して殺人に殺人で正確に対応するけれども、殺人を隠す殺人者の心の動きを「良心」の欠如として断罪するという偏りをみせる。

しかし、殺人者の沈黙に対応するのはハムレットにおいても沈黙であり、前者の罪障感に対応するのは後者の遷延である。どちらも、復讐の正当性に基づいて行動しながら、自分の権利意識の背徳性を感じている。

父を崇拜する王子の心の習性は王権体制の産物であり、国民全体の安泰という大義名分を持つが、王子の心で演じられる血生臭い闘争は、王国の平和と見えるものが勝者の威力による脅迫的な支配によることを暴露している。

すでに述べたように、死の不安から来る嫉妬の狂気が、集団の安定の条件と信じられている。秩序の美意識が嫉妬深さを隠している。この隠蔽作用は、闘争的自己主張が産み出す痛みが新たな表現を求める批評として正当に働くのを妨げる。

王家の家庭楽園の崩壊の物語に限って見れば、今展開しているのは、死の不安に晒された世界でも父と母と子はどこまでも父と母と子の絆に結ばれているという物語であり、同時に、出来合いの楽園の特権的な所有の幻想によって父と母と子が互いの真実から隔てられる物語なのである。第一独白の特徴的な主題は叔父と母への軽蔑と非難、すなわち〈排除〉であるが、これは「父」の「威光」を中心に、夫に「寄り掛かって」いた「母」の〈信頼〉の主題に対立する。

「デンマークを友人の心で見ると」ように論ずる母の言葉においては、二人の「兄

は自分の死に独りで立ち向かう他はない。それが真相なのだ。生き甲斐を得るためには死を超越しなければならないが、人々は死を追い払うという約束を信じて、権利のために殺し合う羽目になり、約束に裏切られている。

死を隠す反応は、短絡的であるけれども、世界を生きるに価するものにしようとする積極的な欲求の表現である。人々は、他者を求める欲求に応じて、あるべき世界のイメージとあるべからざる世界のイメージを作り、殺し合いながら世界を支え合っている。そこに呪いを見るか希望を見るか、それが他者への具体的な態度を決める。ハムレットは母を断罪することによって、母一人ではなく、母をここにあらしめるに至ったすべての過去を中傷し、母があらしめたいと願うすべての未来を中傷し、彼に優しさと偉大さと美しさを教えたすべてのものを中傷し、彼自身を中傷しているのである。

5

ハムレットの道徳的感受性と彼の負う復讐の正義とが一つに結びつくのは、「僕に予言の力が！」(1. 5. 40) という叫びにおいてである。そこで彼は自分の演じるべき物語を知る。すべて物語には、それ以上遡っては因果の形式が壊れてしまう判断の基点がある。「予言する魂」が〈復讐物語〉を最終的な因果形式として指定し、ハムレットは文句なく神の手先となる。

ハムレットの密かな直感とクロウディアスの極秘の殺人とが符合した。ここに王子の感受性の秘密が隠れている。王子はこれを彼の「予言する魂」を介する啓示と見る。しかし、彼は父の横死も亡霊の出現も予言し得なかった。亡霊出現と聞いて殺人を思ったのであるから、予言でも透視でもない。純粋な符合である。余りの符合を偶然とは信じ兼ねて神秘現象と説明したのである。しかし、これは偶然の符合ではなくて、必然の符合だった。

兄王を殺す弟の心の動きと、父王が叔父に殺されたと想像する息子の心の動きと、全く互いに独立な二つの心理現象の間に厳密な対応があって、洞察力や猜疑心の秘密を明かしている。父の死後の世界についての王子の判断と自分の死後の世界についての死者の判断とが酷似していて、相互の証拠と解される。これは合わせ鏡に似ていて、もともと同じ物語につながる同じ反応の機制が共通に所有されている。皆が別個に相手の姿に同じ物語を読み取って同じ物語をなぞれば、「予言」通りの物語が演じられて互いの猜疑心を満足させるだろう。各人の心を隠して、不健全な物語が一人で歩くのである。

叔父を徹底的に軽蔑する教育がハムレットに密かに施されている時、クロウディアスは自分の奪われた権利の意識に密かに身を焦がしている。クロウディ

に従う人々との関係なのだ。ハムレットは叔父を軽蔑していて、その支配を認めることができない。

兵士達が、敗北の不安をデンマークの特権意識で隠すのと同じく、ハムレットの父王崇拝には、特権による領有の意識、競争者への優先の意識、倒され交替される不安が密かに貼り付いていた。ハムレットは父の偉さをすべての前提に据えるので、父が偉いから叔父を軽蔑するという論理的順序になっているが、実は、「威光」は「兄弟」の存在を認めないのだ。王達の勇ましい争いを促すのは、王権に内在する〈嫉妬〉の性格である。

王子が抱いている父王権絶対主義は美的で宗教的な表現を得ているが、叔父の蔑視を共有するのが父子関係であるのを思えば、この疑似宗教はハムレット自身の相続権の間接的な主張という意味を結果的に持つことになる。「クルミの殻の中で宇宙を領有する」(2. 2. 264—265) 彼には、叔父と争う野心は全くないが、野心が無くても、継承の潜在的な争いの只中に生まれた者は野心の等価物をそれとは判らない形で持っている。

第一独白は精神性の名によって肉体性を超越しようとする基本的志向とその失敗を示すが、叔父に対するハムレットの拒否反応もまた、以上説明したように、人間関係を歪める利害の対立をそのままにして自分の要求だけを神聖化する試みに終わっている。しかし、死にたいと感じる無私な感情の動きは、叔父を拒否することによって、父の栄光の虚偽を告発し、ハムレット自身の特権意識を告発していることになる。

実際、ハムレットが叔父を王としてどのように非難しようと、その非難される王としての資格においてクロウディアスは甥が直接の継承者であると宣言している。新体制の肝要な因子として、王妃の再婚がこの宣言に直接間接にかかわっているのは疑いを容れない。母の行動に対するハムレットの疑惑は、「デンマークの友のように」(1. 2. 69) 振る舞う王妃の行動の底の、息子の権利を保全しようとする動機に応じていて、その権利の不自然な人工性を射当てているのである。

そのように自分を共犯と見るならば、この猜疑心は一応正確で公平であると言える。だが、その正確さが世界を悪に沈める。なぜなら、例えば第一独白のハムレットが他者の犠牲において王子であり続けていることを理由に、彼を邪悪と呼ぶならば、それは「露の玉」の悲しみを無視した邪悪な呼び方だからである。兵士の「心の底のむかつき」(1. 1. 9.) を洞察しないで亡霊に鉦を振るうことを非難するのも邪悪である。

必死に守られているのは命であり、生きる権利である。必死に隠され排除されているのは死であり、弱さである。共同で死に立ち向かいながら、それぞれ

は無関係の「不死」(145)の「威光」の幻想に乗っ取られていた。皮肉にも、死んだ男は「ハムレット王そのまま」の姿でしか現れ得ない。

このようにそれぞれ狂気染みた感受性を持つ人々は、習慣に従って王国を構成している信頼すべき人々である。だから、道徳的意志と狂気とを区別する必要があるが、それは自己矛盾を生み出す意志は人間自然に調和しない狂気であることを自覚することなのだ。ところが、ハムレットの独白は、自分の行動を道徳的意志で説明し、他者の行動に不自然さを見つける強い傾向を示している。ここに多分、問題の根がある。誰にとっても自分を分析して自分が信奉する図式の狂気に思い至るのは至難なのである。

さて、兵士達は不安に満ちた世界で希望を王家に託している。彼等は昨夜の心配ごとを王子に託す。しかし、ハムレットにとって帝王の偉さは、兵士一人一人の命を救う能力にあるのではなくて、比類の無い「男」(1. 2. 187)のイメージになりおうせる能力にある。それこそホレイシオが「美しく勇ましい姿」と呼ぶものであり、「弱さ」を示さず、「弱さ」の前に勝ち誇るのが特徴である。すなわち、死すべき者の姿、死に迫られた人間像を隠すのが「威光」の役目である。それを、死者が、生前の習慣通り装っている。

一方、父の栄光独占権を信じるハムレットは、デンマークが奪った領土の領有権の正当さを唱える兵士達に似ている。彼等は前王が一騎打ちによって前ノルウェイ王から奪った領土をデンマークが領有し続ける法律上の権利を信じている。ところが隣国の王子が争い好きと聞けば忽ち敗北の不安に捉えられて逆上するのである。芝居の冒頭で彼等は、闇の中の同胞に鉾を振り上げないではない不安に支配されて生きている状況を示す。心深く巣くった不安は勿論死の恐怖である。先に述べた既得権と化した欠失感とは、死の恐怖の変形したものである。権利を信じるとは死の恐怖に逆上していることであって、その逆上状態が、「王国」への「忠誠」の名で合法化された猜疑心に満ちた攻勢防御の態勢である。この集団的な、しかし狭量な攻勢防御反応の人格的な表象が「威光」の「勇ましい姿」なのである。

ハムレットは「威光」世界の内部の住人であって、彼の「日の神」は兵士達の「前王ハムレット」と違って死の恐怖や敗北の不安から隔絶している。王子は、闇の中で王宮を警固する兵士とは違う。彼の「王」は、兵士達が王に託した希望が凝集して、不死性そのものとなったものである。父の死の相対性をハムレットが受容できないのは、父王崇拜が不死性の崇拜であるからであって、「弱い」身体も死も無常も排除されているからである。

毒蛇に噛まれれば死ぬという個体の自然な事実には抵抗するのは、社会関係によって合法化された「威光」の不死性なのである。すなわち、威光は、王と彼

の幸福に役立ち得る身体を持つ人間のことである。しかし、この視点が私的な権利の掟に背馳するのである。〈救済者〉を十字架にかけるというのは、他者の挺身を浪費することであり、引き裂かれた救済者としての自分に気が付かないことである。ハムレットが〈救済者〉の責任を把握できないのは、救済が「神」や「王」の彼岸性から来るのではなく、「永遠なる者」こそ命ある人間同士の思い遣りの祈りに臨在することに気がつかないからである。

だから、ハムレットの盲点をこの制度の善悪の凶式によって断罪しても、母を断罪するハムレットの不毛を繰り返すだけだ。自分の再婚のために息子が不幸になったと信じ込んだ時、息子の攻撃の下で真っ黒な恥辱の汚点となるのは、母の決断における〈挺身〉という意味の部分なのである。

ハムレットは「デンマーク王子」という生まれを負って、父と母との家庭的楽園で育てられ、王と妃が王子をそのように育てることを許す人々によって育てられて来た。母を理解出来ないハムレットの感受性の困難は、息子を見守るガートルードの生き方の困難にほかならないのであり、それは父が負ったまま死んだ困難であり、この王家に希望を託すデンマークの生活術の困難である。

4

前王の亡霊とおぼしいものが現れて、夜番の兵士達は動転して哲学者を呼ぶ。彼の質問は成功しないけれども、彼がノルウェイ王子の蜂起を知っていたところから、亡霊は、「国家」の危険に関係すると解される。亡霊から何も聞き出せなかった彼等は、王子に知らせに来る。

父の亡霊出現と聞いてハムレット王子が内心で直感するのは、国の危険ではなくて、王家内の殺人事件である。それをもし兵士達が知ったら、呆れて、気違いだと思ったことだろう。

しかし、前王の亡霊の出現を国家の危険の予兆だと解釈して不安に駆られ、鉾を振るって未来の秘密を聞き出そうとするのも狂った話しなのだ。打ち掛かるのは兵士の習性であるけれども、空を切ることはできないという意味では、「空しい敵意」(1. 1. 146)の理不尽さは兵士にも直ぐ判る。しかし、その空しい行動の底にある狂気、未来を自分だけ密かに知ることによって他者を出し抜こうとする狂気は、不問であるだけでなく、忠誠と呼ばれる。

近衛兵の鉾が王の亡霊に振るわれる。ところで、亡霊が「装う」「美しく勇ましい姿」(1. 1. 47)は前王を支えた兵士達の武器の威力の総和だった。だから亡霊とは、勝利を保証する「威光」(145)の幻想が王の実体を疎外する「実効の無い暴力」(144)であったことを訴える存在である。彼は生前彼の本性と

こういうわけで、様々な思いをそれぞれの内に隠しながら、「この戦い強き国」(1. 1. 9.) は、今日もどうやら一日を切り抜けて行くように見えたのだ。

デンマーク体制が今日も昨日と同じく安泰であるとすれば、今日ハムレットの悲痛を誘っているものは、昨日彼に満足を与えていたものなのである。連帯性から言えば、昨日と比べて世界を呪うより、無常に耐えて世界を「友達のように見る」(1. 2. 69) のが理が適っている。呪う時、共同の「習慣」は、人の苦痛を無視してのし歩く「怪物」(3. 4. 161) となり、「天使」(162) はかき消える。

ガートルードが何かの大義によって再婚を承知したのであっても、この再婚が父と母と子との家族的な愛情の秩序に負わせた傷についてのハムレットの感覚は正しい。だからこそ、「黙って」いるハムレットの習性は、王妃にあってそれがどんな形でどのように耐えられたかを洞察する手掛かりとなる。

父の死に続く変転を黙って受け入れる他ないハムレットであっても、子としての彼は母に深い関心をよせる。デンマークの人々が王妃の再婚を王権体制の習慣と必要に従って受け入れている時に、ハムレットは家族の情によって家庭の崩壊に抵抗している。その忠誠な人々にも家族の情の密かな領域があって、体制の命令と激しく衝突することもある。王妃にもある。

ハムレットは「記憶」の母を疑うが、愛し合う父母の姿の記憶がハムレットの満足の記憶だからその喪失が嘆きに価するのである。分化した感受性の源にある血肉と化した愛の庭の記憶が無ければ、第一独白の呪いは生まれえない。だが、独白の視野には愛を受けた王子自身の姿は全く入っていない。天上の〈形〉はその〈意味〉ではない。もし子が母に向ける関心が母が子に示す愛情の反映であるならば、ハムレットが父の死をきっかけに母に寄せる関心は、夫の死をきっかけに母が息子へ寄せる関心に対応する。しかも、母のために役立つことを子は要求されないのである。〈意味〉を認識しなくて済む程に完全に、「余りにも陽を浴びて」(1. 2. 67)、息子は守られて来た。

生まれて以来「王子」であったハムレットが、父が死んだ今も、何の不思議もなく「王子」であり続けている。新王に「跡継ぎ」であると宣言されても、政治の生臭い世界におけるその意味を全く考えないで済んでいる。すなわち、ハムレットが死んだ「日の神」をひたすら恋う「露の玉」であり得るのは、何もできない身体を嘆いて過ごすのを許されない者の働きに支えられてのことなのである。母を非難するハムレットは、〈救済者〉を引き裂いた無知の民に似ている。

ここで〈救済者〉は、神秘化され権威化された特別能力者ではなくて、他者

た教条主義者のように集団全員を告発する他はない。その時彼は「教会法」の教条主義と「王権」の権威主義との馴れ合い関係を再現する。

実の兄弟姉妹の交わりとは異なる「近親相姦」は、法の都合による便宜の類推措置である。その便宜性を無視する教条主義は、その措置の受益者の立場を純粹に反映する。ここで受益者を自分の妻に弟が近づくのを拒否した得た筈のハムレット王とすれば、王子は、ハムレット王自身ならば大逆罪によって処罰したであろうものを、教会権威による「近親相姦」の断罪によって処罰しているのであり、処罰力を背にして成立した呪いを実行する処罰力を持たないというハムレットの不安定な状況が、王権の処罰力と宗教権威の処罰力との癒着を暴露している。

王子が信じる制度の美は制度の権力構造の苛酷さの覆いなのである。「弱き者、その名は女」という観念は、実は愛情が堅いかどうかの問題ではなく、「男」の権威制度に対立する「女」の裏切りを予言しかつ防止する。同様に「近親相姦」も、兄弟と姉妹との性関係が問題なのではなくて、一家の権力を一人の男に集中させ父から息子に伝える意志を示している。権利意識から裏切りの不安が生じ、裏切り者が作られるのである。

ガートルードの再婚が許容されたのも、愛情を重んじたからではなく、「近親相姦」が疑似的な類推に過ぎないからでもなくて、王権体制の安定に必要なだったからである。ガードルードは、前夫の妻だったばかりに、前王の寡婦、王子の母という巨大な「名」を帯びた「王国の繋ぎ」(1. 2. 9)である。ハムレットの記憶する父と母と子の三位一体の秩序は、デンマーク国家の名によって、前王の死にもかかわらず修復して維持された。

秩序の安定の要求に沿うものと信じられていることが肝心なのである。そこに「私達のことも考えて」(1. 2. 7.)と言うクロウディアスの大義名分がある。その大義の実行過程で私的な満足が伴うとしても、王がそれを告白する必要が無いのは、叔父がにこやかに約束する継承権を不審に思う義務がハムレットにないのと同じである。その代償に、ハムレットにとっては重大極まる父と叔父との違いを「王国」の都合は無視したと言えるのである。

ハムレットの自己矛盾は、「人間」と「威光」とを区別しない論理上の欠陥に由来している。だが、これは「王国」の根幹をなす教養なのだ。もしハムレットがある個人を「日の神」と信じることの正しさを訴えることができるならば、王妃がデンマーク王座を神聖視しその約束を信じ、死んだ特定の個人に代わって別の特定の個人に王権を託し、そうすることで夫が大切にしていた国家をも息子をも自分をも生かして行けると信じるのも道徳的なのである。自殺するのでなければ、選択の巾は狭い。王妃ともなれば隠さなくてはならない涙もある。

うすれば父が母に許した特権的な幸福を父の死が裏切ったことは明かだっただろう。しかし、ハムレットの独白宇宙において、王権の威力は、父に貼り付いたまま、王の死を無視し、彼の死に苦しむ者の都合をも無視して、超越的に維持される。そして全く同様に、政治の現実においても、王権の威力は、デンマークの王座に貼り付いたまま、栄光に翻弄される者の苦痛を無視して、超越的に維持されている。その背景を確認した上で、呪いと希望は心の持ちよう次第であり、母が「王子」に托す幻想的期待と子が「王妃」に感じる幻滅とにおいて、母と子は極めて似ていると言って良い。

3

クロウディアスとガートルードによる男女の秩序と兄弟の秩序への裏切りを嘆くハムレットの孤独な声は、王権社会の聖なる英雄像を信奉したために連帯性の自然な欲求を裏切られた精神の苦しみの声である。しかし、苦しみゆえに彼が一層父の英雄像に排他的に密着するので、英雄像が私的家族的な生存権の表現という性格を脱してはいないことが明かになる。実際彼は王妃の再婚を承認している廷臣達や国民を理解しようとしない。「僕の父」についての王子の認識は、「威光」の感受性が父子相伝的であることを示している。王子にとって王の栄光は、デンマークの政治現実の必要を無視して、死んだ父に固着している。父子の絆は権威によって天上性を得たかに見えるが、弟や叔父を排除するほど狭小化しているのである。

ハムレットにとって、父の死も、王を取り替える国家の必要も、総じて家庭楽園への侵害なのであって、その苛立ちを、以前通りの家を守ろうとしない母を裏切り者と指差すことで表わしている。ところが、皮肉にも、ハムレットと相以な形式感覚によって動いているのは、デンマークの政治現実なのである。すなわち、死者の後釜に弟をはめ込むことで、死んだ王の家族関係は王の死にもかかわらず温存されているのである。

しかし他方では、クロウディアスが「嘗ての我が姉、今は我が王妃」(1. 2. 8.)と公言している。〈自分の妻はかつて自分の姉であった〉という明言は、ハムレット流の「近親相姦」概念への公の異論をなすものである。彼は兄弟姉妹同士の間を強行しているのではなくて、実の兄弟姉妹関係と名目上の兄弟姉妹関係を区別している。この区別は自然に付くのであるから、この区別に立った論法の必要を問わずに、区別しない論法で非難するのは独断的である。デンマーク社会が王妃の再婚を「近親相姦」と区別したという事実は、この結婚を「近親相姦」と呼ぶ思考法を相対化する。この相対性を無視すれば、偏っ

の場合と同じであればこそ、父を崇拜して来た王子でも叔父の權威を「黙って」受け入れている。ところが、ハムレットの胸の父の威光が父の死に作用されないのと同じく、彼の期待の中の母は、前王の寡婦という位置にある人物に作用するに違いない様々な政治上生活上の思惑や利害とは一切関係なく、記憶の中で父に対して母が見せた家族的私的関係を温存している。すなわち、彼の聖なる宇宙像は、彼の一家、父と母と子が非生活者的な三位一体をなして天上にあってこそそのものだった。

ハムレット自身の生活の利害は、彼の手をまたずに、王家を中心とする慣習的手続きによって解決されて来た。このハムレットの例は、ガートルードについても同様な留保と酌量が必要であることを示唆している。夫に「寄り掛か」っていた彼女は、同じく寄り掛かっていた息子と同じく、その生活の中で身に付けた価値感覚に従って、夫の死の現実に対応する他はない。母と息子との違いは、ハムレットが今も「王子」であり続けながら母の子であり続けているのに対して、王妃が王子の母である「王妃」であり続けるためには、身の振り方の一つの決断が必要だったことである。王妃のその決断を含む「世界」の営みが、ハムレットに従前通りの価値観を抱き続ける受動的な自由を保証している。それは「習わし」を介する救いでもあるのだ。

だから、この自由は、ハムレットが記憶する苦勞の無い王妃像と同じく、極端に信じられ過ぎれば幻想である。「日の神」の天上世界が幻想なのだ。ということは、王自身にしても、その幻想を信じるならば、いつかは偽りの光を剥ぎ取られる。第一独白において帝王の超越性が死に伴う変化と相続を拒んでいるとすれば、その幻想の影で死の現実突き当たった者の事情を亡霊が示すことになる。

幻想の光を剥ぎ取られた者が墮落者の相を呈するのは、彼が生来犯罪者であるからではない。美醜二様の人間像は、権力の私有を合法化する。だから、人間の生理に従って王が死に、政治の生理に従って他の誰かが王に立てられる際に、超越性の虚偽が見える。しかし王子は、彼自身の優越の虚偽に気が付くよりは、幻滅を呪われた闇と感じ、超越性の虚偽の破綻を身体で繕う役に当たった者を裏切り者として呪うのである。

事実、ハムレットを「黙ら」せているのは、王権への反抗を禁じる秩序感である。王国の秩序が、その虚偽を感じる心を圧倒している。もし死を望み現実を否定することでハムレットがこの衝突を処理する他はないとすれば、母には愛する息子がいるという一点だけから見ても、現実を否定しない者は王国の秩序に希望を託す他はない。ハムレットが母の再婚に父の威光への裏切りを読むならば、先ず父の死そのものを王の完璧さへの裏切りとみなすべきだった。そ

いに包まれている。下半球に母の姿を見つけたのだ。呪われた者のために用意された呪いの言葉が、掟通りに、ハムレットによって母に向けられた。「弱い者、その名は女だ」。

これは下界でウィッテンベルグの学者を待っていた最初の試練だった。不肖の弟子は逆上し、見事につまづく。掟通りに押し通せないのだ。天上の光が仰ぎ見る者の目を引き付けるのは、光の無い下界との比較の構図によるのである。「光」を信仰するなら、構図通りに暗黒には呪いの言葉をあてがえば良いのであり、そこに見捨てられた女の墮落にも、その息子の悶えにも同情すべきではない。呪いを浴びた母達と息子達がもしその状況を呪うならば、彼等の絶望は叛逆として裁かれるべきであって、答えないことで呪いを示す「神」を恨むのは筋違いである。しかし、ハムレットは、呪われた母を下界に見捨てる覚者の自己満足を持ってない。そのため彼は「神」に黙って見捨てられる。つまり、この「神」の模範的教条主義に見習うことができない。

それでも神への裏切りの自覚無く神を呼ぶのは、彼のつまづきが彼の本性にとっては裏切りではないからである。人間ハムレットの側から言えば、学者ハムレットの〈掟〉こそ〈祈り〉を裏切っている。聖なる宇宙像によって支配はするが、聖なる宇宙を地上に築く責任を負ってはいないのである。

呪われた母に対してハムレットが抱く関心が自然であるならば、〈女の弱さ〉に対して用意されていた呪いの掟は不当で暴力的なのである。今それを女への裏切りと仮に呼ぶことにすれば、ハムレットが母の中に見つけたと信じている裏切りは、彼の信奉する宇宙像の中に刻印された〈女による裏切りの形をした女への裏切り〉の投影かつ再現なのである。〈女は弱い〉という聖なる断言は「女」に自前の選択能力を始めから認めていない。ハムレットは「獣」に優るものへの期待に照らして「獣」を評価するという倒錯に陥るほかはない。もともと、この聖なる断言の効用は、ハムレットの今の哀傷に応えることではなかったのである。

ハムレット自身が発する呪いが示すように、母が天上に置かれたのは、いつでも「日の神」の都合次第で地上に引き据えられ得る潜在的犯罪者「弱き者」としてであった。王子が父だけに与え続ける権威から見ても、前夫の死後に王妃に生じる変化から見ても、息子の目にガートルードが天上に属したのは、彼女が天上にある夫に属する妻だったからである。ハムレットの記憶において母は保護の一切を父に依存して「寄り掛かる」(1. 2. 143) 姿をしている。

ハムレットは「僕の母」の二つの姿の違いを説明できない。しかし、今や帝王の超越的威光がクロウディアスに支配者の姿を与え、その支配に従うべきであるという規則が従前通り国民を支配していて、そのこと自体はハムレット王

の」を全く酌量していない。

もし、権威に隠れて満たされる性的情念が悪いというのであれば、王子が回想する父母の天上的な結婚生活も、生生活動の苦勞を消し去った二人だけの恋愛空間に簡略化されていて、しかも神聖化された帝王の愛の拳動が肉体的な男女の営みを隠している。これは肉体の生は意味が無くて、光の観念の宿り手であることだけに意味があると言いたげな思考の特徴であるが、どちら側から眺めるかで評価が逆転するのである。

ハムレットは自分と「世界」との係わりの肉体性の感覚から遠い。男女関係についての彼の認識は、天上的か性器的かどちらかに振れる。要するに、父母の結婚生活から自分が肉体世界の一部として創造されたという事実が無視される。精神と肉体との区分に応じて、ハムレット自身を精神と同視し、母を肉欲性と同視するのであるが、「露の玉」と「弱き者」という二通りの人間像は、肉体生活の管理権を失った人間状況を反映し、無力感を共通にしている。もし「弱い者」(146)が「女」ならば、〈黙っている露の玉〉〈何もできずに泣いているハムレット〉は「女」である。すなわち、彼が〈女の弱さ〉と「名付ける」ものは彼自身の性質であり、彼は自分の分担すべき責任を母に帰しているのである。〈女は弱い〉と彼が宣言する時、彼の教養の一端である〈女は性的に不道徳である〉という観念が作られた経緯が再現されている。

母についてハムレットが抱く観念が独断に過ぎることは、彼の独白の言葉の矛盾構造から推論され得るだけではない。ハムレットの思想に対して直接の反証をなすのは、彼自身の経験と欲求である。すなわち、〈肉欲だけの女〉という「半獣」的イメージは、彼が見知って来た母の「記憶」(143)からしても信じられず、「獣」(150)の愛のありようとしても信じられない。

母妃の再婚を「宮廷人」ハムレットは無思想的に受け入れなくてはならない。他人なら、それで十分に道徳的だったであろう。受け入れられ成立したその再婚を「学者」ハムレットが「女」への尊大な侮蔑の思想によって呪う。他人ならそれで十分に突き放すことができたであろう。宮廷人と学者の習性を激しく拒否しているのは母の子ハムレットの感情なのである。

ウィッテンベルグ帰りのデンマーク王子の「記憶の石板」(1.5.98)に「写された」(101)教養通り、ハムレットは、父が去って叔父が後を襲った宮廷を、天上の「日の神」と地上の「半獣」との両極世界として描く。それは「半獣」への嫌悪と軽蔑が示すように、「類い稀な王」(1.1.139)を尊敬する王子が描く聖なる宇宙像である。さて、父の死後もその光は上半球に誇りやかに輝き続けるのであるが、凶像の満足度はすっかり違って、ハムレットの心は呪

「固い身体」を離れた「露の玉」のイメージは、優しさを求める人間的な動機を美しく語るが、この世から消えて美の世界に転生する魂の物語においては、肉体は最初から喜びに与れない失敗者である。自殺を形だけ禁じて、思想自体は自殺の勧めに等しいのだ。個々の人間の苦痛が、修正し取り返し得る集団的な錯誤の印として生産的に取り上げられないからである。

従って、＜人は彼自身の私有物ではなく、彼の快楽と苦痛の感覚は彼の特権ではない＞。彼は「世界」に組み込まれており、「世界」も直接間接に彼に希望を託している。世界への呪いは行動の指針としては役に立たない。父の死を機にハムレットが新たに世界と自己を認知し始める時、過去に閉塞された言葉が閉塞状況を再生産し、閉塞された言葉を生んだ状況が再現する。しかし過去そのものが現れるのではない。どんなに不毛でもそれは創造であり、どんなに逆説めいても認識と批評と生産の行為である。

2

生き甲斐を求める生存活動の基になるのは、快楽と苦痛を感じ、それに伴って善と悪との社会感覚を有する身体的存在である。ハムレットはこの真実を、彼だけの孤独な負担として表わす。他者も相似の動機と負担を負っていることを、ハムレットの＜言葉＞が覆い隠している。しかし、彼の不快感を誘い出す他者達の姿は、ハムレットが他者達に見せている姿と相似である。苦痛を独白に押し込めて人間像の真実を覆い隠す力は、この社会に共通に働く習慣的な力であって、ハムレットの思考の自由を奪う言葉は他の人々の思考の自由をも奪っている。ハムレットは「すべて従う者達の鑑」(3. 1. 154)の役を負って、この文化の美意識と錯覚と生命力を代表する。

ここで母について彼が抱く＜肉欲だけの女＞という観念について考えてみよう。この観念は、偉大な父が死ぬと直ぐに下劣な叔父と再婚した母の愛情の無さと弁えの無さに対する王子の驚きと嫌悪を伝える。この嫌悪は、叔父と母に従って生きている自分の「肉体」への絶望に対応する。ところが、それでも彼が「黙って」生きているのは、「王子」として「世界」に組み込まれた生活の中で父の光を胸に宿して来たからなのである。黙るに至るまでの生涯のドラマを斟酌しなければ、「黙っている」「王子様」の外形は、彼自身の批評基準に照らして、新体制への醜い追従者でしかない。父王の傍らに立っていた「王妃」が叔父王の傍らに立っているという社会的事実を父への個人的破誓とみなし、「近親相姦」(157)という形式的解釈を加え、早急さを「手練の技」と見て成り立った＜肉欲だけの女＞のイメージは、この女の「見掛けを越えた内側のもの

闘争に無縁であっても、王権の舞台で行われて来た闘争の幻想性を小宇宙的に再現するのである。

ハムレットが好んで世界を歪曲しているのではなく、歪曲された世界像を相続しているのである。だから、〈信じて行う歪曲〉と〈歪曲に我慢できない誠実さ〉とが両立し、対立し、葛藤を起こす。このことが大変重要であるのは、それが「威光」の約束を信じる全ての人にあてはまるからである。

この独白の以上のような特徴を、かりに次の四つの相にまとめてみた。

〈生命は自己目的的に価値の源泉である〉。自分が生きていることをハムレットは無条件に承認している。身体は無意味だと言いながら危険を避けている。精神活動は生きていることから発している。これはハムレットのあらゆる宗教的言辭にまさって、「自殺するな」という「教会法」(1. 2. 132)に先行する「永遠の」(131)人間的真実の証しとなっている。生きていること自体から発する生の満足の沈黙の主張が神の永遠性の根拠である。その前では、自殺の簡単さの観念は冒瀆であり、禁令の支配力の観念は虚構である。

学者ハムレットは地を呪い天上に憧れるが、それで幸福にはなれない。精神の自律自足という哲学の理想は幻想であり、その幻想は絶望から生まれるのである。世界の人々と心を共にしていると感じられなければ、人は孤独と不安に呪われる。呪いも怒りも、他者との交わりを求める激しい感情である。

従って、〈生きることは生き甲斐を創る運動である〉。苦痛は訴えであり、正直な批評であり、変化への誘いである。その可能性を試みる過程が、生きることに他ならない。ハムレットの義務感は、苦痛の表現を抑えて旧来の生活体系を守ることが最も苦痛を少なくする方法であると宣言している。最善であると習慣的に信じられているものが自発的な批評力を抑える。黙っている個人の中で、隠れた苦痛が無限に再生産される。この制度の致命的な欠陥は、各人が自分の苦痛にしか出会わないことである。我慢するにしても癒すにしても、独りで処理する他はない。だから、苦痛の受動的なありかとしての世界内身体と、苦痛の超越的処理者としての世界外自我とが両極化する。

それであるから、〈精神と身体との二元的な区別は、自己を満たすのに失敗した人間の不幸な幻想である〉。第一独白において本来区別され得るのは、現実の批評としての願望と、願望充足の行動過程としての生活術である。ある期間の満足の経験の後、ハムレットがその天上から落ちたとすれば、まだ世界は恒常的に満足を提供し得るに至っていないのである。「世界」を共同の楽園を目指す共同の舞台と見ないで、与えられた楽園からの取り返しのつかない「墮落」と見るならば、苦痛は無価値で不毛なものとなる。

にされたと感じる。

黙らせられ行き場を無くしていても、欲求自体は健全な道徳的視点を堅持して社会的な批評行為本来の性格を示し、エルシアノ世界が共同の高次の理念に調和して動くことを要求し、理念に背く母の身勝手な行動が抑制されることを要求している。「沈黙」は、前述のように〈習慣〉の自己保全的性格を際立てると共に、〈感情〉の批評的性格を際立てる。個人が批評の源泉なのである。

ところが、ハムレットの批評の鑑である「日の神」(140) 父王像は、父の死を受け入れることを心理的に難しくする残像というよりは、死を受け付けない実効のある支配力を持っている。激しい欠失感を伴う父王像は、この内省的独白の暴走から生まれたものではなく、このように激しく欠失されるために予め用意されていた。それは、喪失感というより、記憶された権利意識である。すなわち、「日の神」のイメージは、喪失を承認しない性質の既得権の表象なのだ。権利が現に失われた現実在即して言い直せば、それは再び欠失状態に帰るのを拒絶することに決めた欠失感なのである。

すなわち、現実を呪いながら父を想起するハムレットの意識は、彼を支配する価値尺度が闘争を条件に産み出された歴史を再現する。欲求が、何かの満足の記憶を、奪われた権利として主張するのである。ハムレットを孤独に追い込むこの主張は連帯性の阻害状態を意味する。彼は習慣生活を同じくする他者を「演じ得る行為」(1. 2. 84) を演じる偽善者だと感じ、自分だけは「見掛けを越えた内側のもの」(85) ゆえに絶対に正しいと感じる。

ハムレットの抱くこの不公平な正義感とは、それを元来支えた闘争の意志を、「類い稀な王」(1. 2. 139) あるいは「男のなかの男」(187) の光を浴びた楽園の至上感に変えて表現している。この満足感が王子の中にすでに述べたような矛盾を生み出すが、ハムレットには、「威光」の実体が欠失感を既得権として主張する闘争の意志の装いであることも、それが父の生涯にどんな歪みを生んだかも洞察できない。皮肉にも、王子が父を永遠の光の国に祀り上げている時、闇の中から父の亡霊が助けを求めているのである。

ハムレットの困難は、彼の中で同じ力が反対向きに衝突したことにある。父が生きていた時には特権的な威光が父に固着して王子の意識を覆っていた。特権が叔父に移ると、父に固着した威光は、叔父のそれに、鏡のこちらとあちらのように鮮やかに対立する。事實は、ハムレットの王家の閉鎖的な特権があって、二人の兄弟が順に王になったのである。しかし、ハムレットの神聖化された特権意識の世界では、特権的な欠失感と特権的な満足感という同一意識の二つの相が、幻想的な闘争を演じている。宮廷美学の申し子であるハムレットに蓄えられた言葉の世界で行われるこの隠れた闘争は、王子自身は血で血を洗う

かえって、「習わし」が持つ、他者の中で生き延びるための厳密細心な拳止という基本的性格を際立てて見せる。

「世界」(134)を呪うハムレットが、王子として立てられて安全に生きている自分を疑わないので、自己分裂が起こる。まず、精神は肉体の意味を認めない。胸に宿る絶大な価値のイメージに身体は無縁である。生き延びている「肉」(129)の「固さ」¹は「露の玉」(130)である心にとって厭わしい。ところが、「黙っている」のは、彼の「心」(159)が「砕」けても世界に順応することであって、生活術は逆に精神の意味を認めない。ハムレットの言葉に従うかぎり、精神と肉体は、互いに知らぬ顔で我が道を行く他はない。けれども、高い位階水準に身体ハムレットが満ち足りているわけでも、高い学問水準に精神ハムレットが満ち足りているわけでもない。精神と身体の分裂に人間ハムレットが苦しんでいる。神にも社会にも忠実であろうとする精神が、どちらかに単純化できなくて苦しんでいる。

しかし、苦痛を表現する彼の言葉は正確ではない。彼は生きるのは無意味だと言いたいのではない。この分裂は疑似分裂である。「露の玉」になるか「心」を「砕く」か、どちらを選ぶかという問題ではない。分裂状態が強いられている。答えない神を呼ぶ彼の心には、自殺は厳罰だと決めて後は知らぬ顔の神への恨みもこもるけれども、神を信じるか捨てるかの問題ではない。「自殺したい」と言うのも、禁じられているという前提、「黙った」部分は行動に表わさないという条件、の下でのことである。

自分にも神にも嘘を吐いているのではなくて、死にたいのも生きているのも、王子としての生活の結果であり側面なのである。しかし、「黙って」いる彼の心は、「御機嫌よう、王子様」と近寄って来る兵士達の心からこの上無く離れている。言い替えれば、「世界の習わし」を、自分を支える他者達と他者達に期待される自分との相互関係として把握していない。そのために「世界の習わし」が皆「無意味に見える」。

理想を現実から区別するなら、理想の可能性を担う自分と現実に参加している自分とを区別すべきなのだ。そうすれば行動の主体性を要請され、自分自身への裏切りをも自覚するだろう。ハムレットが他人を非難できるのは、「習わし」に支えられているという自覚を欠いているからである。先日までの満足すべき境地を失った不満が、連帯性の欠如を露わにする。

連帯性の崩壊の代償が「雑草のはびこる庭」(135)の観念である。彼は連帯責任を感じる代わりに、世界の裏切りを言う。彼は「黙って」〈失われた庭〉を指し示す〈神〉あるいは〈神の代理〉である。皮肉にも、まさにそのために彼は、彼と連帯しないらしい「永遠なる者」によって呪われた世界に置き去り

ある復讐者〉に似合う人物像からすくなくならずはみ出していることが、近代「ハムレット」批評の始まり以来多大な関心を引き付け多岐の解釈を生んで来たからである。S. T. Coleridge はこの王子に父の横死と母の悪に会って復讐の義務に適応できなくなった繊細な感受性の病的な偏りを見た¹。T. S. Eliot は、新たに盛り込まれた「母の罪」の主題が〈復讐劇〉と〈芸術的〉に折り合っていないために、王子が解決不能の情緒過剰に陥っていると読んだ²。W. Knight は亡霊と結びついて「死の使者」と化した精神状況にハムレットを置いた³。何れの場合も主人公の精神の特異な適応不全状況が問題になっている。以降、精神分析の手法によって神経症や神話の内に探られる憂悶の病理学があてはめられても、問題は基本的には同じ姿をしているように見える。しかし、これは果たして特異な個人的な不適応や倒錯の問題なのであるか？あるいは、個人の不適応を引き起こす特異な状況の悪しき倒錯の問題なのであるか？

1

ハムレットの第一独白の際立った特徴は、生活術と価値観との分裂である。

独りになるとハムレット王子は言う、〈世界が嫌だ、死にたい〉。彼の魂は死んだ父王の輝きとともにある。今はここにはないその栄光を慕って、彼は下劣な叔父王と不倫な母妃に導かれる世界を嘆き呪う。あらゆる良き希望とともにあの光が去ってしまったと言い切ることの外にこの世界には仕事はもう残っていない。そのようにハムレットの言葉は確かに聞こえる。

だが足音が近づいて来ると、ハムレットは「胸が破れても、黙っていなければならない」(1. 2. 159)* と言う。それで、対人関係の中の彼が見える。独白には内と外二つの表情があった。言い直してみよう。

ハムレットは生きているのが厭わしい。光を失った世界が呪われた終末を招き寄せるのを眺めていなくてはならない。「黙って」！その辛さを独り我慢すれば、彼は何時もの彼である。「ごきげんよう、王子様」(160)。

「死ねたら良い」と口走りながら、ハムレットは彼の役を「黙って」勤め「なくてはならない」。彼は自分の役柄を心得て世界の一角を占め、喜怒哀楽に満ちた身を生き延びている。デンマークの人々の目には喜怒哀楽は見えないけれども、王子の生き方は、生まれてこの方「習わし」通りだった。ハムレットはこの瞬間も、習慣的に、生きている。彼を王子と呼ぶ人々と、習慣的に、協調している。彼は「習わし」の無意味さを告発するが、その独白行為は「習わし」の一部として成り立つ。独白は他者を直接に動かすことを断念しているので、

* 以下 *The Riverside Shakespeare* (1972) による。

“THE IMPOSITION CLEAR’ D”

——シェイクスピアにおける時間と救済——

丸 田 敬

序章：合わせ鏡の虚と実

本稿は、シェイクスピアにおける悪と救いの問題に触れることになるが、何かの形而上学に従って登場人物達の関係を読み解こうとするものではない。

私見によれば、シェイクスピアの描く人間関係には次ぎのような面がある。人物達はそれぞれの動機に応じて行動し、衝突によって相互に衝撃を経験するが、個々の人物は自分の行動の条理を信じていて、世界が条理通りではないことを悲しんだり憤慨したり抵抗したりする。彼等は、全体的に見れば、そのような不条理を内在させた世界の住人であり、今もそれを作り出すのに参加しているのであるが、それはその世界で彼が占める位置に応じてその不条理を克服しようと苦労しながら生きていることを意味する。個々の人物は自分の当惑から発想する他ないために、他者の当惑は見えにくく、彼の行動が他者の目には不条理に見え得ることに気が付くのは難しい。その結果、彼等は人間に不条理な悪を予定し、猜疑し、見出す感受性を発達させる。同時に、思わざる敵に苦しむ自分の誠実さは世界の不条理な相貌を越えた超越的な条理の観念と結びつく。すなわち、善悪二元の超越世界の観念は人間精神の地上的社会的構造から生まれるのであり、その意味は陰に陽に条理を求める人々の刻々の祈りを込めた動きのなかに存在する。

この作者の手法は、支配的行動様式を〈救いの願望を託された神聖な形而上学〉と、〈苦痛からの解放を託された行動様式〉とに分析する。宗教的権威を帯びた名誉ある行動様式は、当惑の処理を期待されながら、苦痛を再生産し得る。それでも習慣的な形而上学による世界解釈に隠された形で、個々の人々の心身の活動は、創造的な可能性に満ちている。

以上のような観点からシェイクスピアの幾つかの戯曲を以下分析したい。最初に「ハムレット」を取り上げるのは、王子ハムレットが〈復讐劇の主人公で